

実践研究

アジアサッカー育成年代選手の競技力向上に関する研究
～ブルネイ U-17 選手と 2 か国の競技力の実態調査から～

Improvements in young Asian soccer players' performance
-Survey of Brunei U-17 selection team and two other countries-

松山 博明¹⁾

Hiroaki Matsuyama¹⁾

Abstract

The performance of Brunei U-17 football team players was assessed using the Diagnostic Inventory of Psychological Competitive Ability for Athletes (DIPCA.3) and compared with players in Bhutan and the Northern Mariana Islands. The results indicated that Brunei's players scored significantly lower than Bhutanese players in seven factors and the Northern Mariana Islands' players in one factor among twelve factors. Brunei's economic policy, the low unemployment rate, alienation from international competitive environments, and the low performance of the national team might be related to their lack of competitive consciousness, victorious spirit, and desire for success. Conversely, Brunei's players scored significantly higher than the other two countries' in two factors and the Northern Mariana Islands' players in one factor. Brunei's stable political and economic conditions and the promotion of sports policy might have improved the sports environment and contributed to players' stable mental condition resulting in the positive outcome. The government of Brunei, the Football Association, and football coaches should continue to train and strengthen players with a long-term perspective to establish football as Brunei's national sport.

キーワード：アジア貢献事業, サッカー, 育成年代, トレーニング

Asian contribution business, Soccer, Upbringing time, training

1. はじめに

ブルネイ・ダルサラーム国 (Negara Brunei Darussalam 以下:ブルネイとする)は東南アジアのボルネオ島に位置し、北は南シナ海に面し、残りはマレーシアと陸続きとなっており、面積は三重県とほぼ同じという非常に小さい国である (ブルネイ・ダルサラーム国のサッカー, online)。ブルネイは日本国 (以下:日本とする)との関係の中で、日・ブルネイ外交樹立後 30

年を超えた対日関係について、「2 国間関係は良好であり、要人往来も活発」であるとしている。また、経済関係に関して日本は、長年にわたりブルネイ最大の貿易相手国である。内訳を見ると、ブルネイから日本への輸出のほとんどが石油・天然ガスであり、日本からブルネイへの主な輸出品目は、輸送用機器及び部品である (独立行政法人日本スポーツ振興センター, 2017)。

1) 追手門学院大学

Otemon University

一方、スポーツにおいて日本とブルネイへの支援・協力事業として、公益社団法人日本プロサッカーリーグ（Japan Professional Football League 以下：Jリーグとする）や公益財団法人日本サッカー協会（Japan Football Association 以下：JFA とする）、日本スポーツ振興センター、国際交流基金など、これまで2012年から6年間で合計103回実施されている（独立行政法人日本スポーツ振興センター、2017）。

こうした日本との関係性を深めていく中、ブルネイは、生活の質を向上させる効果的な方法であることから、スポーツを文化的要素の1つとして捉え、1989年に国家スポーツ政策を設定している。国のスポーツ政策では、生涯スポーツと競技スポーツに分けられており、生涯スポーツは全ての年代層にスポーツ等への参加を奨励するもので、競技スポーツはエリートスポーツの発展に寄与するものと位置づけられる。また、国民のスポーツ実施率等統計（性別、年代別）においてサッカーは、最も人気のスポーツである（独立行政法人日本スポーツ振興センター、2017）。そのサッカーにおけるブルネイ代表は、1999年のマレーシアカップで優勝しているが、それ以降国際大会等での飛躍的な成果を残すことはできていない。そこで、ブルネイサッカー協会は、サッカーの本格的な強化を行うため対策として、JFAとの間で提携を結び、2015年から日本人指導者の派遣依頼を行った。ブルネイに派遣された2019年1月31日まで4年間、海外派遣サッカー指導者の育成年代ブルネイ代表監督であった藤原孝雄氏（以下：藤原監督とする）は、選手や親にとって、サッカーは「娯楽」の感覚が大きく「競技」としての理解がまだ少ないのが現状であり、ほとんどの保護者は「サッカーは勉強時間を削減する要因」と考えていると述べている（JFA 公認指導者の海外派遣、online）。更に、2019年からブルネイユース育成担当コーチとして赴任した埴田淳コーチ（以下：埴田コーチとする）は、ブルネイの文化、風習、宗教、家族との繋がりを大切にしながらも、現状でできることから少しずつ取り組んでいきたいと述べている（JFA

公認指導者の海外派遣、online）。このように、ブルネイは、国民にサッカー文化が根付くまでは時間がかかると思われるが、派遣された指導者による地道な努力は、ブルネイサッカーに少なからず良い影響を与えていることが考えられる。

これまでアジア貢献事業^{注1)}において派遣された国の中から、松山ら（2016a）の研究ではカンボジア王国（以下：カンボジアとする）サッカー代表育成年代の約1年にわたるトレーニング内容の時間比率を比較検討し、選手の競技力に関するJFAフィジカル測定^{注2)}および心理的競技能力診断検査（Diagnostic Inventory of Psychological-Competitive Ability for Athletes³ 以下：DIPCA.3 とする）^{注3)}の実態を明らかにした。その結果、カンボジアアカデミーの5項目に分類したトレーニングでは、技術トレーニングと戦術トレーニングの割合が多かった。また、カンボジアは、継続的にトレーニングを行ったことによって、JFAフィジカル測定の14種目中9種目に有意な向上が認められた。DIPCA.3の結果、12項目中7項目で日本よりも有意に高値を示した。しかし、1回目よりも3回目の測定で数値が低下した。これは、カンボジアが、積極的に公式戦や海外キャンプなど国際経験を積み、勝者のメンタリティーを植え付けるために取り組んだ一過性の結果であると読み取れた。

また、松山ら（2016b）の3か国によるU-14代表選手の競技力の実態調査では、海外派遣サッカー指導者が指導するカンボジアとラオス人民民主共和国（以下：ラオスとする）、北マリアナ諸島自治連邦区（以下：北マリアナ諸島とする）の3か国によるU-14代表選手の競技力に関する調査（JFAフィジカル測定やDIPCA.3）を行い、各国の競技力の実態を明らかにすることを目的とした研究がある。その結果、カンボジアは他国と比較して、JFAフィジカル測定のアジリティの能力が高かったが、キック力やスローインの能力が低かった。また、DIPCA.3は、5因子の能力が高かった。ラオスは他国と比較して、JFAフィジカル測定のス

ピード、キック力、ジャンプ力の能力が高かった。また、DIPCA.3は、有意に高値の差は見られなかった。北マリアナ諸島は他国と比較して、JFA フィジカル測定 of ショトルラン、バウンディング両足の能力が低かった。また、DIPCA.3は、4因子の能力が低かった。しかしながら、日本と比較した場合、JFA フィジカル測定や DIPCA3の能力が低かった。したがって、3か国は、競技力を向上させるために指導者による継続的なトレーニングの実施や多くの国際大会の経験を積む必要があることが明らかになった。

このような派遣された指導者の国による学術的研究は、現地の選手やチーム状態を知るために重要である。特に心理状態を定量的なデータで示すことは選手達の変化を把握する上で有用であり、具体的なコーチング内容を検討する事の一助になることが期待できる。しかしながら、これまで研究対象とされた国は限られており、ブルネイにおいても派遣された指導者の語りから、その国の実態を推測するものであり、現地の選手や指導者に関する実態を示す学術的研究は、松山ら(2021)のブルネイサッカー育成年代選手の競技力に関する実態調査以外、報告されてきていない。著者は長年に渡ってアジアサッカーの競技力向上をサポートする為、JFA アジア貢献事業として派遣された指導者から依頼されたプロジェクトに参加し、ブルネイにおけるサッカーの競技力向上に尽力してきた。したがって、ブルネイサッカーの現状を把握するためには、ブルネイの選手と他国を対象とした研究が必要であり、これらの選手の心理的側面に関するデータを蓄積していくことが重要であると考えられる。

そこで本研究では、ブルネイ U-17 選手の競技力を明らかにするために、DIPCA.3の測定を行い、他の2か国の選手(松山ら, 2019)による比較を行うことを目的とした。

2. 研究方法

2.1. DIPCA.3

徳永ら(1991)による DIPCA3の検査の質

問項目は、競技意欲(忍耐力、闘争心、自己実現意欲、勝利意欲)、精神の安定・集中(自己コントロール能力、リラックス能力、集中力)、自信(自信、決断力)、作戦能力(予測力、判断力)、協調性の5因子12下位尺度で構成されている。したがって、5因子ではなく、より細分化した12下位尺度から調査をすることで詳細な比較が可能になると考えたためである。

2.2. 調査対象者

2018年12月23日のセレクションの後、ブルネイ17歳以下選手(平均15.7歳)(14 ± 17歳)を対象にDIPCA.3を実施した。得られた回答のうち、記入漏れおよび誤記入のあったものを除いた50名を分析対象とした(有効回答率83.6%)。調査は、研究者本人がブルネイ王国バンダルスリブガワン・ムアラ地区に出向いた。

なお、調査対象者には、調査の目的などを簡潔に説明した。この調査によって、不利益が生じることは一切ないこと、個人情報秘匿する目的から呈示しないことなどの内容を提示し、承諾を得た上で実施した。その後、質問紙は、その場で回収した。

2.3. 調査期間

調査は、2019年2月18日のトレーニング前に実施した。

2.4. 調査方法

ブルネイ17歳以下選手50名(n=50)と松山ら(2019)による2か国によるU-17代表選手の競技力の実態調査からブータン王国(以下:ブータンとする)(n=21)、22名中21名(有効回答率95.4%)、平均年齢16.62歳(15歳 ± 17歳)、北マリアナ諸島自治連邦区(以下:北マリアナ諸島とする)(n=10)、21名中10名(有効回答率47.6%)、平均年齢16.10歳(15歳 ± 17歳)の3群に分け、比較検討した。この調査においては、17歳以下選手として各国のセレクション等で選抜された選手であり、限られたサンプル数となった。

2.5. 統計処理

調査において得られた測定値は、IBM SPSS Statistics 21 を使用して一元配置分散分析を行った。さらに、有意差が認められたものについては Bonferroni の多重分析を行った。

なお、それらの統計上の有意水準は5%とした。

3. 結果

3.1. DIPCA.3 の分析

DIPCA.3におけるブルネイ 17歳以下選手 50名 (n=50) とブータン (n=21)、北マリアナ諸島 (n=10) 選手の3群に分け、一元配置分散分析の結果を表1に示した。

ブルネイは、ブータンと比較して、忍耐力 ($F(2, 78) = 14.21, p < 0.05$)、勝留意欲 ($F(2, 78) = 3.62, p < 0.05$)、自信 ($F(2, 78) = 23.45, p < 0.05$)、決断力 ($F(2, 78) = 6.55, p < 0.05$)、予測力 ($F(2, 78) = 3.84, p < 0.05$)、判断力 ($F(2, 78) = 3.81, p < 0.05$)、協調性 ($F(2, 78) = 9.53, p < 0.05$) が有意に低値であった。また、北マリアナ諸島と比較して、忍耐力 ($F(2, 78) = 14.21, p < 0.05$) が有意に低値であった。しかしながら、ブルネイは、北マリアナ諸島のみ自己コントロール能力 ($F(2, 78) = 4.97, p < 0.05$) が有意に高値であった。また、ブータンと北マリアナ諸島と比較してリラックス能力 ($F(2, 78) = 18.94, p < 0.05$)、集中力 ($F(2, 78) = 18.94, p < 0.05$) が有意に高値であった。

4. 考察

ブルネイは、ブータンと比較して、12因子中7因子が有意に低値であった。また、北マリアナ諸島と比較して、1因子が有意に低値であった。しかしながら、ブルネイは、北マリアナ諸島のみ1因子、2か国と比較して2因子が優位に高値であった。

ブルネイが、他国と有意に低値であったことに関して、ブルネイサッカー交流の派遣団員は、GDP の約半分となる石油や天然ガスを背景とした経済政策と失業率の低さ、国際競争環境との乖離が要因の一つとして、サッカー選手が必要不可欠な競争意識又はハングリー精神 (忍耐力、勝留意欲、自信) やサクセスへの欲求 (決断力、予測力、判断力、協調性) の欠如があると述べている。特に、2か国と比較して有意に低値であった忍耐力を身に付けることが難しいと考えられる理由の一つとして、ブルネイサッカー交流の派遣団員は、選手の「上手になりたいという思い」と、現場側の「なぜ上手くなる必要があるのかという思い」に、目的に対するギャップが存在し、その「Why」を埋める「希望」を子供達に示すシステムと共に、それを実現しうる計画を建てていく必要があると述べている (21世紀東アジア青少年大交流計画, 2011)。また、ブルネイ代表は2021年5月27日に発表された最新の国際サッカー連盟 (Fédération Internationale de Football Association: 以下 FIFA とする) ランキング

表1 DIPCA.3 U-17 選手の競技力による3か国の比較

項目(12因子)	ブータン(n=21)		サイパン(n=10)		ブルネイ(n=50)		F 値	多重比較結果
忍耐力	16.05	2.18	15.80	1.62	13.26	2.34	14.21 *	ブータン>ブルネイ,サイパン>ブルネイ
闘争心	16.19	2.27	16.90	1.20	15.64	2.27	1.59 n.s.	
自己実現意欲	15.76	2.07	15.60	1.58	14.60	2.01	3.02 n.s.	
勝留意欲	14.95	2.48	13.30	1.83	13.36	2.38	3.62 *	ブータン>ブルネイ
自己コントロール能力	10.05	3.47	7.90	1.66	10.84	2.52	4.97 *	ブルネイ>サイパン
リラックス能力	8.95	3.73	7.40	2.07	11.22	2.38	10.70 *	ブルネイ>ブータン,ブルネイ>サイパン
集中力	8.71	3.12	7.90	1.60	12.14	2.59	18.94 *	ブルネイ>ブータン,ブルネイ>サイパン
自信	17.67	2.01	13.70	1.25	13.98	2.33	23.45 *	ブータン>サイパン,ブータン>ブルネイ
決断力	15.00	1.95	13.50	1.51	12.98	2.32	6.55 *	ブータン>ブルネイ
予測力	14.48	2.68	12.60	2.12	12.98	2.08	3.84 *	ブータン>ブルネイ
判断力	14.05	2.52	13.00	2.11	12.36	2.33	3.81 *	ブータン>ブルネイ
協調性	17.67	2.01	16.90	1.79	14.92	2.84	9.53 *	ブータン>ブルネイ

*: $p < 0.05$, n.s.=not significant

において、191位 (FIFA ランキング, online)、代表チームの国際的競技レベルは決して高くはない (ブータン187位, 北マリアナ諸島非加入国)。徳永ら (2000) によると競技レベルの高い選手ほど自信 (自信, 決断力), 作戦能力 (予測力, 判断力) で顕著に優れ, そのほか競技意欲 (忍耐力, 闘争心, 自己実現意欲, 勝利意欲) や精神の安定・集中 (自己コントロール, リラックス, 集中力) で優れていたと報告されている。平田 (2008) もレベルが高くなるほど, 試合などの大事な局面で自信を持てるため, 決断力, 競技意欲の忍耐力, 勝利意欲, 作戦能力の予測力, 判断力がより高まる傾向にあると考えられる。このことから, GDP の約半分となる石油や天然ガスを背景とした経済政策と失業率の低さ, 国際競争環境との乖離と代表チームの国際的競技レベルが低いことが競争意識又はハングリー精神やサクセスへの欲求の欠如によって優位に低値な結果になったと考えられる。

しかしながら, ブルネイは, 北マリアナ諸島のみ1因子, 2か国と比較して2因子が優位に高値であったその理由を考えたい。ブルネイが, 他国と有意に高値であったことに関して, ブルネイは, 豊富な石油・天然ガス収入により, 一人当たりの国民の所得水準が高く, 社会福祉も充実していること等を背景に, 政治・経済情勢は安定している。それに加え, スポーツ振興施策として, 指導者養成, 子供のスポーツ参加促進施策, 大衆へのレクリエーション事業や交流試合などを通じ, 心身の健康を増進することを目的に, 人口の集中する地域では少なくとも2キロに1つはスポーツの出来る施設 (2014年現在, 673件のスポーツ施設を保有, サッカーコート140件) を設けている (独立行政法人日本スポーツ振興センター, 2017)。このことから, ブルネイの政治・経済情勢が安定しており, スポーツ振興施策を実施し充実した環境下によって選手の安定した心理状態が有意に高値になったと考えられる。

以上のことから, ブルネイは, サッカーを国民的スポーツとして根付かせていくためには, 国やサッカー協会が指導者と共に長期的な視野

に立って育成や強化を継続していく必要があると考えられる。

今回の研究結果を踏まえ, 現地でブルネイサッカー関係者や指導者に調査結果をフィードバックし, 強化策 (競争意識又はハングリー精神やサクセスへの欲求の欠如) の具体的な提案を行った。しかしながら, ブルネイサッカーの発展を考えた場合, 国全体の経済的情勢による影響や代表チームの国際的競技レベルが低いことなどは, 短期的な改善を図ることは不可能であり, 研究の限界を感じた。

5. まとめ

本研究では, ブルネイ U-17 選手の競技力を明らかにするために, DIPCA.3 の測定を行い, 他の2か国の選手 (松山ら, 2019) による比較を行うことを目的とした。その結果, ブルネイは, ブータンと比較して, 12因子中7因子, 北マリアナ諸島と比較して, 1因子が有意に低値であった。しかしながら, ブルネイは, 北マリアナ諸島のみ1因子, 2か国と比較して2因子が優位に高値であった。

ブルネイが, 他国と有意に低値であったことに関して, GDP の約半分となる石油や天然ガスを背景とした経済政策と失業率の低さ, 国際競争環境との乖離と代表チームの国際的競技レベルが低いことが競争意識又はハングリー精神やサクセスへの欲求の欠如によって優位に低値な結果になったと考えられる。

また, ブルネイが, 他国と有意に高値であったことに関して, ブルネイの政治・経済情勢が安定しており, スポーツ振興施策を実施し充実した環境下によって選手の安定した心理状態が有意に高値になったと考えられる。

以上のことから, ブルネイは, サッカーを国民的スポーツとして根付かせていくためには, 国やサッカー協会が指導者と共に長期的な視野に立って育成や強化を継続していく必要があると考えられる。

注1) アジア貢献事業

JFA は、サッカーを通して子どもたちに明るい未来を与え、アジアサッカーの普及と発展につなげていきたいという理念のもと、アジアサッカー連盟 (Asian Football Confederation: 以下 AFC とする) に加盟している国や地域に対して、さまざまなアジア貢献事業を行っている。こうしたアジアでの共存共栄を目指す事業の一つに、コーチや審判員を養成するための指導者としてチーム審判インストラクターなどを派遣する人的支援・知的支援プログラムがある (JFA, 2013)。

注2) JFA フィジカル測定

JFA フィジカル測定ガイドラインに従って実施した。また、「JFA フィジカル測定ガイドライン」に記載されている測定種目は、サッカーのフィジカル面のあらゆる要素をカバーできるように選択されている。本研究では、その中から海外でも測定可能な 14 種目 (30m 走, 50m 走, ショトルラン, アジリティステップ 50, アジリティフォワードラン, ロングキック右足 1 ステップ, ロングキック右足フリー, ロングキック左足 1 ステップ, ロングキック左足フリー, スローイン, バウンディング両足, ホッピング右片足, ホッピング左片足, 12 間走) を抽出し、調査を実施した (JFA, 2006)。

注3) DIPCA.3

DIPCA.3 は、スポーツ選手に必要な試合場面での一般的特性としての心理的能力を診断するための心理検査である。個人やチームの DIPCA.3 を分析し、心理的スキルのどの項目をトレーニングすればよいか、トレーニング内容を決定し、試合で優れた心理状態を作り、実力を発揮できるようなメンタルトレーニングを実施する目的を持つものである (徳永ら, 1991)。

引用参考文献

- ブルネイ・ダルサラーム国のサッカー
<http://dearfootball.net/article/228> (2020年6月10日参照)
- 独立行政法人日本スポーツ振興センター (2017) 平成 29 年度調査報告書 ASEAN 地域におけるスポーツニーズ調査研究フェーズ。日本スポーツ協会, pp.175-187.
- 21 世紀東アジア青少年大交流計画 (2011) 2011 年度ブルネイサッカー派遣事業報告書, 2012 年 8 月 財団法人日本国際協力センター pp.1-19.
- FIFA ランキング
<https://fifaranking.net/nations/brn/> (2020 年 6 月 10 日参照)
- JFA 公認指導者の海外派遣
http://www.jfa.jp/social_action_programme/international_exchange/dispatch_member/ (2013 年 6 月 10 日/2020 年 6 月 12 日参照)
- JFA (2006) JFA フィジカルガイドライン, アサヒビジネス (株): 東京, pp.30-55.
- JFA (2013) JFA PLOFILE. JFA 機関紙: 東京, pp.1-26.
- 平田大輔, 佐藤雅幸 (2008) 心理面に関する実態調査からみた大学スポーツ選手の現状と課題 - DIPCA.3, メンタルヘルス評価尺度を中心として -。専修大学, 社会体育研究所報, Vol. 56, 39-47
- 松山博明, 松竹貴大, 土屋裕陸 (2016a) アジアサッカー育成年代選手の競技力向上に関する研究 - カンボジアフットボールアカデミー選手の実態調査から -。大阪体育学研究, Vol.54, 3-13.
- 松山博明, 関口潔, 松竹貴大, 土屋裕陸 (2016b) アジアサッカー育成年代選手の競技力向上に関する研究。 - 3 か国による U-14 代表選手の競技力の実態調査から -。大阪体育学研究, Vol.55, 51-59.

松山博明, 松竹貴大, 二宮博, 武藤克宏 (2019) アジアサッカー育成年代選手の競技力に関する研究 - 2か国による U-17 代表選手の競技力の実態調査から - . 追手門学院大学スポーツ研究センター紀要, Vol.4, 1-6.

松山博明, 松井健, 馬込卓弥, 辰本頼弘, 巽樹理, 須田芳正, 福士徳文 (2021) アジア育成年代サッカーの実態調査 - ブルネイ王国 U-15 アカデミークラブに着目して - . 追手門学院大学スポーツ研究センター紀, Vol.6, 19-27.

徳永幹雄, 金崎良三, 多々納秀雄, 橋本公雄, 高柳茂美 (1991) スポーツ選手に対する心理的競技能力診断検査の開発. デサントスポーツ科学, Vol.12, 178-190.

徳永幹雄, 吉田英治, 重枝武司, 東健二, 稲富勉, 齊藤孝 (2000) スポーツ選手の心理的競技能力にみられる性差, 競技レベル差, 種目差. 健康科学, Vol.22, 109-120.

(受付日 2021/9/29 受理日 2021/12/8)